

[船橋監督+参加者のディスカッションから]

—————@JAZZ喫茶「映画館」

参加者：東京は加害者でもあるけれど、被害者でもある。東京東部の放射線量はチェルノブイリの第四地区と同じくらいだともいわれています。福島のほうがは比べものにならないとはいえ、被害者意識ももつべきではないでしょうか？

監督：双葉の方たちも被害者であると同時に、雇用などの形でこのシステムに寄与していたという意味では加害者の側面を持っています。事故後、「自業自得論」がよく言われました。電原3法の交付金をもらって町が潤い、仕事ももらえて、自分たちで選んだことでこうなったのだから自業自得だと。これは皆さん、どう思われますか？

参加者：私は青森出身です。最初は反対する人がたくさんいましたが、長年の原発推進側のキャンペーンとお金の力で、だんだん減っていったという経緯があります。青森はやはり生活水準が低いので、地元の人たちだけの責任とはいえないと思います。

参加者：私は父方が沖縄で、基地のこともまったく同じ構造だと思います。危ないと思いながらも選ばざるを得ない弱い立場に置かれていると感じます。

監督：60年代には原子力の平和利用というキャンペーン、70年代にはオイルショックの危機感から、80年代後半から90年代には地球温暖化を防ぐクリーンエネルギーだとして、日本全体が原子力を賞賛してきました。鉄腕アトムもドラえもんも原子力を使っています。原子力はかっこいい未来のエネルギーだという空気を共有してきました。それが今こうなって、福島の人たちを指して自分で選んだんだから自分が悪いと言えるのかどうか。少なくとも、僕には指さす権利はありません。僕らも当事者です。

参加者：都内の大学生です。人間は自分が経験をしないと、自業自得といった批判をやめないのではないのでしょうか。日本全国の人の考えを変えるのは難しいと思います。監督はこの映画を通して何をしたいのですか？

監督：双葉町の方々の経験を共有してもらうことです。この映画の96分が皆さんに双葉町の方たちの身になって考えていただける機会になってほしいと思っています。この映画の宣伝や紹介では「脱原発」という言葉は一切使っていません。推進派の人も反対派の人もみなさんに観ていただいて、自分で考えていただきたいと思っています

参加者：広島・長崎の原爆投下についても、中国、韓国やアメリカでは自業自得だという声があります。でも、実際に広島や長崎の被爆者の方が行って映像を見せながら自分たちの体験を語ると、侵略戦争の報いなどとはとてもいえない大きな犠牲を強いたものだったことを知って、たいいてい人は自分の意見を撤回します。双葉のことも同じだと思います。自業自得論を言う人たちは福島や六ヶ所の人たちの状況について、まだ本当には知らない。この映画はその答えを模索しているひとつの芸術的表現だと理解しています。